目次

オシラ神と人形……柳田國男（一）

挿畫――米澤の農人形（三）……オシラ樣三種（五）……鳥取の流し雛（八）……紀州湯川明神のヒトカタ（九）……水使神社神札（一四）……北越の祝棒とヨメタヽキ棒（一八）……イナウ（一九）……八王子の車人形、日向景清矢島日記（二四）……秩父人形、葛の葉子別れ（二五）

偶人信仰の民俗化竝びに傳說化せる道……折口信夫（二九）

挿畫――日向岩川八幡の大人彌五郎（三二）……七尾の山車人形（三六）……陸中の草人形（三七）……まぢない人形二種（三八・三九）……淡島願人（四一）……あまがつ（四五）……沖繩念佛者の人形（四六）……正保・慶安の人形芝居舞臺（四八・四九）……陸中遠野のおひら樣（五二）……武藏西多摩のおひら樣（五三）……博物館所藏のおひら樣（五四）……古代三河雛・薩摩雛（五五）……元祿時代の立雛（五六）

くゞつといふ語について……松岡靜雄（六〇）

巫女の持てる人形……中山太郎（六三）

百太夫考……吉井太郎（六九）

挿畫――百太夫の圖（七〇）……百太夫社（七一）……百太夫の神札（七二）

西宮人形座の餘蘖……鷲尾正久（七四）

挿畫――人形吉遺品八重垣姫（七六）……人形吉所藏の累（七七）……人形のからくり（七八）

朝鮮の人形芝居……宋　錫　夏（八〇）
日本と歐洲の絲操り……小　澤　愛　圀（八六）
挿畫――パンチとジュディ裏表（八六）……支那の人形芝居（八七）……箱の中の人形舞ばし（八八）……ビラのいろいろ（八九）……結城孫三郎一座、壺坂の舞臺面（九〇）
我が偶人劇の世界的地位と其特色……南　江　二　郎（九三）
挿畫――古代イタリーの人形（九八）……世界人形芝居分布圖（一〇一）……セイロンの操り人形（一〇三）……ジャバの影繪（一〇六）……支那の影繪（一〇八）……吉田冠十郎の車人形、松王丸（一一二）……文樂座の八百屋お七（一一四）
人形と人形つかひ……小　寺　融　吉（一二〇）
挿入――オシラ神とノロマの見取圖（一二〇）……「後はむかし物語」挿畫の人形（一二一）……秩父人形の骨組（一二一）……土佐掾の人形芝居（一二六・一二七）……正保慶安時代の人形芝居（一二八・一二九）……操舞臺名目（一四二・一四三）……江戸の一人遣ひ（一四七）……江戸の三人遣ひ（一四八）……文樂座「紙治」の舞臺面（一五六）
佐渡のノロマ人形……藤　井　新　二（一六〇）
佐渡ノロマ人形の機構……小　田　内　通　久（一六二）
挿畫――ノロマのからくり（一六三）……ノロマの頭（一六六）……衣裳（一六九）……裸人形（一七〇）……着衣姿（一七一）
長崎と人形……增　田　廉　吉（一七三）
口丹波佐伯の人形燈籠……南　枝　覺　書（一七八）

秩父に於ける人形芝居……大亦詮一郎（一八〇）
挿畫——吉田人形の足（一八二）……吉田人形の頭（一八三）……秩父人形の衣裳（一八五）……秩父人形の頭（一八六）……秩父人形の骨組（一八八）
安房平群村の人形芝居……座間太郎（一九一）
挿畫——阿波のお鶴（一九二）
岩代の高倉人形……本田安次（一九二）
花やしきの絲あやつり……上原七六（一九四）
挿畫——巡禮とバラの舞臺面（一九八）……松根義雄氏（一九九）
アヤツリと小人形……中野桃男（二〇四）
影繪・寫し繪・指人形……小寺融吉（二〇八）
挿畫——牛と船頭（二〇八）……福助の表と裏（二〇九）……首と袖（二一三）……胴と足（二一四）
玉川文樂の車人形と寫し繪……萬屋長右衛門（二一九）
挿畫——車人形の三番叟（二一九）……頭の種々（二二〇・二二一）……うつし繪の機械と原畫（二二二・二二三）
私の知つてる寫し繪……長尾豐（二二六）
挿畫——新作うつし繪二圖（二二八・二二九）

春駒の圖……（二八）
傀儡子の圖……（五八）
傀儡子記・遊女記……（五九）
紙細工の人形つかひの圖……（六二）
淡路岩屋神社境内の人形操……（七四）
正ちやんの冒險……（九二）
人形舞はしの狐の圖……（一二〇）
結城孫三郎一座の寫し繪……（二三四）
日本に來たロシヤの影繪……（二三二）
傀儡師唱歌……（六一）
傀儡師のうた……（七三）
あやつりの隱語……（六二）
支那の人形芝居……（九一）
のろまの秘事……（一二〇）
のろま管見……（一七二）
臺灣の人形芝居……（一七七）
人形拔萃……（一九一）
近頃の素人の人形芝居……（二〇二）
美濃眞桑村の人形芝居……（二三一）
人形見立圖おそめ久松……（二五四）

英文劇誌に依る人形劇研究文献……南江二郎（二三三）
人形芝居に關する文献……小澤愛圀（二四四）
人形芝居に關する日本の文献……（二五〇）

新刊紹介——爐邊叢書三册……博美生（二五六）　與夫傳を讀む……YK生（二五六）
諸國祭祀暦（三十七項）……（二五八）

文樂座「新口村」の舞臺面……（口繪）
表紙繪……小寺健吉

新口村の舞臺面（口繪解説）

正德元年（一七一一）に近松門左衞門が、「冥途の飛脚」を書いた。それを安永二年（一七七三）に菅專助と若竹笛躬が合作して改めたのが、今日行はれる「けいせい戀飛脚」で、寫眞は此の中の名高い新口村の舞臺面である。

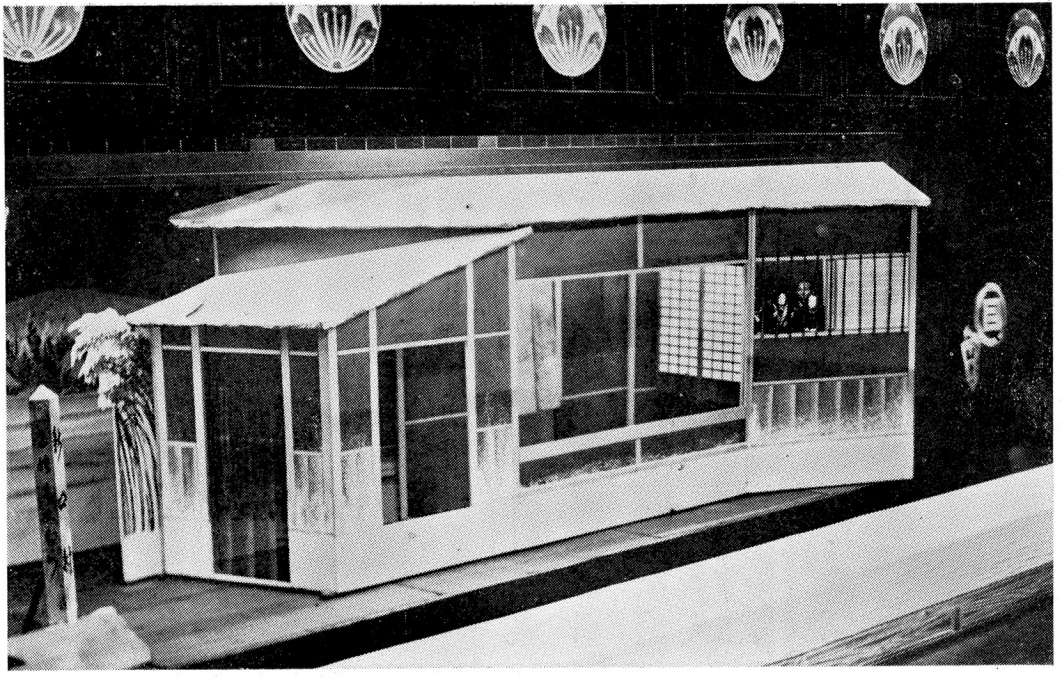
上に一區劃毎に紋を描いた紋板が、舞臺の間口一杯にある。今は無くなつた水引幕の代りであらう。下の一區劃毎に×の模樣の、俗にタスキと稱するものと、上下相對してゐる。かくの如き上下二つのものは、この舞臺面が、舞臺にして且つ劇場であることを現はしてゐて、普通一般の歌舞伎の舞臺と興味ある區別を見せてゐる。

タスキを三の手摺とも呼ぶ。それに接近した張物を二の手摺、或は前の手摺とも呼び、雪景色の心で白い布で覆ふてゐる。上の部分が傾斜の形になつてゐるのは、手摺の蔭に臺を置いて、その上に座蒲團なぞを置く場合のために有効であるが、同時に江戸時代初期の人形芝居の手摺の傳統を殘してゐるのである。

紋板と、その次ぎの羽目板との間は、奥行二間餘で、この間の下が附舞臺で、下手と上手に揚幕があり、各々に紋を染めぬく。上手の揚幕が寫眞に現はれてゐるが、これは東京の廣い劇場での場合で、大阪の文樂座では、前の手摺と平行せず、垂直になり、下手の揚幕と相對する。前の手摺の影で暗くなつてゐる所が附舞臺の部分で、俗に船底と云ふ。

船底のうしろの一段と高い舞臺が本手、卽ち本舞臺で、上の羽目板から奥になるわけである。紋板より羽目板が長く垂れてゐるため、一文字幕を用ひてゐない。そこで孫三郎の家は、本手に飾られてゐるのだが、家の各部の白い所は、下の見物席から見ると、前の手すりに隱れるので、この寫眞は二階から撮影したゝめ、見えずとも好きものが見えるのである。これは人形芝居を演ずる劇場が、本來は二階や三階の客席を考へてゐなかつたからである。附舞臺を前につけ加へた時、歌舞伎とちがひ、一段と低い舞臺にしたのも、人形芝居なればこそである。

家の下手入口には繩のれんがかゝり、正面奥への入口は常ののれんがかつてゐる。家の中には元より床も壘もないのは、手づかひの面白さである。さらでだに小さい人形が、窓から外をのぞくところは、なんと可憐ではないか。出づかひだから、忠兵衞を使ふ吉田榮三の大きな顔が出てゐるのは、常の時は別として、此の場合一寸面白くない。梅川は吉田文五郎。



文樂座の新口村の舞臺面